



そこで、差し当たり、本研究会が目指すところは、「科学に関心を持つ宗教者」と「宗教に関心を持つ科学者」が互いに胸襟を開いて対話<sup>ディアローグ</sup>（独白<sup>モノローグ</sup>の交換ではなく）を深め、宇宙と人間に関する常識と化した従来の認識を根本から刷新することです。それは、上記の世界観図式において、近代西欧以降に科学分野で欠落してしまった「人間（自己）」と「超越者（神仏）」の二項を本来の位置に回復させることを意味しています。

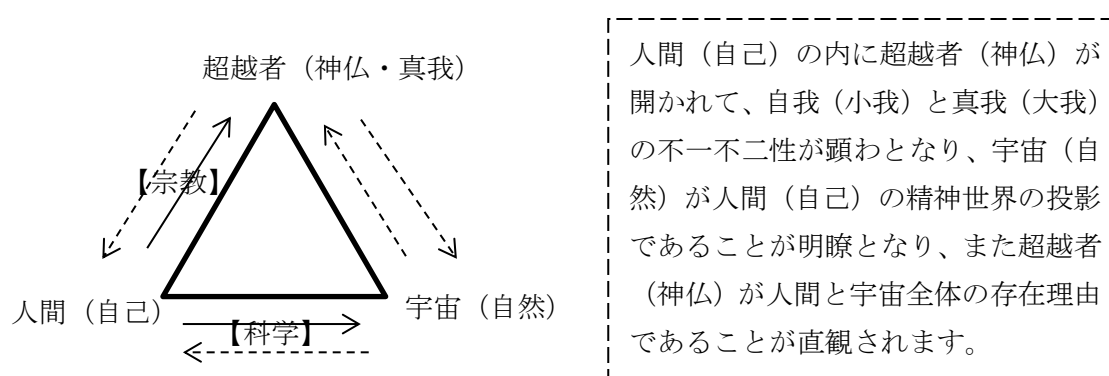
ところで、宗教と科学の関係については、対立、棲み分け、補完、統合（融合）など幾つかの立場から考察されてきました。対立、棲み分け、補完に関しては、宗教と科学は、互いに他に還元不可能です。宗教は科学に還元されず、科学も宗教に還元されません。二項対立が議論の大前提です。しかし、統合に関しては、宗教と科学が互いの境界を突き破って相互浸透する、あるいは有機的に一体化するということが起きます。その統合のための具体的な理論の構築こそが、喫緊の課題なのです。

以上の説明は、近代西欧以降の宗教と科学、つまりキリスト教と自然科学の関係を主に念頭に置いたものですが、実際の宗教と科学は、遥かに多種多様なものです。宗教は地球上の人類史とほぼ等しい歴史を持つものと推察され、教祖・教義・儀礼・信徒などを有する特定の既成宗教教団を考えるよりも、人間が自然本性として本来有する宗教性（＝霊性）を重視すれば、無神論者や唯物論者でさえ、絶対的なものを志向する<sup>ホモ・レリギオス</sup>宗教的な人間（homo religiosus）であると見ることもできます。他方、科学の方も、科学史家の伊東俊太郎が指摘するように、始源科学や古典科学を経て、近現代の自然科学が誕生したと見るほうが、それぞれの科学の特質を考えたり、科学を相対化したりするには好都合でしょう。さらに、超古代文明（ムー、アトランティスや、カタカムナ等）の存在を考慮するならば、科学は広く学問一般の方法を指すものと考えられるべきかもしれません。ここでは、「宗教」を既成の宗教教団への帰属から解放して、人間が自然本性として有する「宗教性（＝霊性）」の意味で用いることにし—この意味では人間は誰でも宗教的です—、「科学」も自然科学に限定せずに、学問的方法をも含む広い意味で用いることにします。

宗教と科学の違いをもう少し際立たせた上で、宗教と科学の統合について考えてみたいと思います。宗教は、「人間（自己）」と「超越者（神仏）」の関係を直覚する—その体験が覚醒（目覚め）や救済（救い）と呼ばれます—垂直方向の探究であり、この実存（ここでいま生きている事実）の根拠を求めて、人間（自己）自身が問いの直接の対象となりますが、通常は「宇宙（自然）」との関係も間接的に問われるはずですが、そこで問われるのは Why（なぜに）であり、宇宙や人間の起源、時空間や（生死の）因果律の誕生、人生の意義や自己の存在理由等に関するものです。通常、それらは即答できない問いであり、神話が象徴的な真実性を帯びるのは、一般的な論理法則や時空間の認識枠組みそれ自体を産み出した根源的なものに関わる点においてです。一方、科学は、「人間（自己）」と「宇宙（自然）」の関係を合理的に説明する水平方向の探究として、探究する人間（自己）自身は括弧に入れて傍観者の如く眼前の自然の事物や事象に関して構造や機能を問います。この場合、「人間（自己）」も「超越者（神仏）」も意図的に括弧に入れられ、「宇宙（自然）」も第一義の「産む自然」

(natura naturans、自然力や自然本性)ではなく、第二義の「産まれた自然」(natura naturata、自然の事物や自然界)に認識の比重が移されます。この二重(人間と超越者)の括弧入れと自然概念の収縮を代償にして、時空間と因果律という認識枠組みの中で自然の事物や事象の相互連関を How (いかに) の形で問い、それに合理的な説明を与えようとするわけです。周知のとおり、現代科学に浸透している思想は、全体を諸部分の総和と見る要素還元論と、万物から生命的要素を捨象した機械論的自然観です。こうした観点からは、「共時性(意味ある一致) synchronicity」の事象は、取り扱うことができません。現代科学の思想とは別に、再現可能性や反証可能性に依拠して観察(帰納法)と実験(演繹法)を行なう「科学の方法」を吟味検討する必要性がありそうです。

いちおう、以上のような違いを確認した上で、「宗教と科学の統合」の可能性を問いたいと思います。宗教が「人間(自己)」から「超越者(神仏)」への眼差しであり、科学が「人間(自己)」を括弧に入れての「宇宙(自然)」への眼差しであるとすれば、「宗教と科学の対話」の積み重ねを通して、宗教は「超越者(神仏)」から「宇宙(自然)」への眼差しを与えられ、科学は「宇宙(自然)」への眼差しを「人間(自己)」へと反転させることになるでしょう。そのとき、実は同時に、宗教における「人間(自己)」から「超越者(神仏)」への眼差しは、「超越者(神仏)」から「人間(自己)」への逆の眼差しと交叉し、科学における「宇宙(自然)」から「超越者(神仏)」への眼差しは、「超越者(神仏)」から「宇宙(自然)」への逆の眼差しと交叉するという新たな事態が発生します。つまり、三項関係の三項それぞれにおいて、他の二項との関係が、二重の逆方向の眼差しの交叉の内から創発されて来るのです。これは、従来の常識的な人間観や宇宙観や超越者観が、根本的な変容を被るということに他なりません。こうして、下図のように、三項それぞれが、他の二項と眼差しが交叉し合います。



さて、「宗教と科学の統合」へと至るための最も有力な通路の一つとなるのは、たぶん人間の存在構造と宇宙の存在様式に着目することでしょう。人間はどのような次元から成るのか、宇宙はどのような次元から構成されているのかということです。人間存在に関しては、霊一心一身(spirit-mind-body, あるいは霊一魂一体)の人性三分説が最も普遍妥当性を持

つのではないかと思われます。ここで特に注意を払うべきは、宇宙の存在は、人間の観察行為によって成立しているということです。宇宙を眺める眼差しを無視した宇宙論は、意味をなしません。宇宙創成を眺めているのは、誰の眼なのか。それが問題の核心ですが、自然科学の宇宙論では、その眼差しが有るのに無化・無視しているのです。一般には、宇宙（世界）の存在様式は、低次元から高次元へと順に「物質→生命→意識→精神→超越者」へと進化・発展すると想定されることが多いのですが、宗教的神話的な世界観では、むしろ反対に「超越者→精神→意識→生命→物質」へと降下（逆進化）したと語られるのが普通です。いずれにせよ、宇宙は、全体として統一されながら、そこには幾重もの自然の分節・境界があって、多次元的な重層構造をなすものと考えられます。その宇宙の多次元的重層構造に精確に対応・照応する形で、人間の多次元的な存在構造も形成されていると推察されます。たとえば、「霊—心（魂）—身（体）」というようにです。霊、心（魂）、身（体）が、それぞれ「超越者—精神—意識—生命—物質」のどこに（あるいは、どの間に）対応するかは、言葉の意味の幅の違いによって、見解が分かれるところでしょう。

上述したことから分かるように、宗教と科学の統合は、人間と宇宙の間に形成された関係の解明を通してこそ、実現される可能性があります。とりわけ、精神（意識と生命を含む）と物質の関係—人間存在に限れば、心身合一の関係—を明らかにすることが、宗教と科学の統合を実現するためには、絶好の理論的な通路となるように思われます。

「精神」と「物質」の間には、一見すると、深刻な隔絶<sup>ギャップ</sup>が横たわっています。精神は不可視的で非局在的であり、物質は可視的で局在的です。思考する実体としての精神は、延長ある実体としての物体（身体）とは、どこにも接点がありません。デカルトは、理論的には十分な解答を用意できませんでした。確かに、延長を持たない精神が、延長ある物質と結び付くことは、原理的にありえません。では、どう考えるべきでしょうか。ベルクソンは、心身関係を空間（非延長—延長）の函数ではなく、時間（緊張—弛緩）の函数と捉えることで、この難問を切り抜けようとしていました。精神の持続（緊張）が弛緩すると、物質が形成されると発想した、驚くべき仮説です。大事なものは、発想の転換です。

「精神」と「物質」の二元的対立を克服する理論として、取り敢えず考えられるのは、「統一理論」と「媒介理論」です。「統一理論」とは、精神と物質を共通に根源から貫くもの（たとえば、波動や、両者に分裂以前の究極粒子・宇宙子。「数」が基本原理か）を想定する理論であり、「媒介理論」とは、精神と物質を媒介するもの（たとえば、神聖幾何学、ホログラム、相似象、曼荼羅等。「形・型」が基本原理か）を想定する理論です。この「統一理論」と「媒介理論」は、必ずしも矛盾し合うものではなく、むしろ最終的には一つに統合される可能性があるかもしれません。また、「数（霊）」と「形（霊）」についても相互変換の可能性があり、そこに「言霊」「音霊」も関わって来るように思われます。

以上述べたことは、一個人の脳裏をかすめた着想でしかありません。参加者の皆様が、それぞれの仕方での問題を考えてくだされば、誠に幸甚です。